甲申旅日記

小笠原長保

よひの雨のしめやかなるも、明日出立たんには如何ならんと、心に懸るものから、馬のはなむけすとて、寄集ひて酒飲み物食ひなどしけるに紛れて、忘れ果たる折しも、彌生望の後二日といふ日の月、丑三つ過る比の空に霞み出て、庭の櫻にうつろふ景色、えも言知らずなん有りける。いで浦賀の官廳にと旅立つは、寅の下りなりけり。兩國橋を渡る頃は、漸〻明ゆくに、角田川の水の流もほのみえて、今も都鳥に言問はまほしくぞ覺ゆる。よべねふらざりし程に、道すがらの事もしらで新橋に至る。此所より品川の驛に至るも亦同し。此所まで送り來りつる人々酒酌かはし別を惜む。

こゝに來て日もたけ芝の浦波を又かけそふる旅のころも手

同し所にて留別の心を、

たけ芝や絞る袂をもろともに思ひもいでよ思ひ出なん

鈴の森にて戯れによめる、

友どちに振すてられて鈴の森今日旅人と身はなりにけり

見つゝや君がとよめりし、荒藺の崎も此邊と聞きて、

今日は又あらゐが崎の浪風ものどかになぎて霞む海つら

大森村の和中散といふ藥賣る家に、暫し休ふ。此所にて約堂栄石に別る、いと名殘多し。

鎌田村八幡塚村を過ぎて、六郷川を舟にて渡る。此水上は、甲斐の大丹波小丹波村の邊より出て、武藏の多摩郡を經る程を、たま川といふ。其末此所に流れ出る。海いと近し。

山吹のそれにはあらで言はぬ色に薄花さく玉川の岸

此川を渡れば川崎に至る。此驛を離れて、八町繩手といふ所に至れば、初めて右の方に山々見ゆる。近くは神奈川の山なり。其上に相模の大山甲斐の山々見えて、霞に霽ゆ。

打わたす山も幾重の春霞棚びく空に雲雀鳴くなり

市場村に女夫橋といふ橋あり。此邊梨花盛りなり。鶴見村の鶴見橋を渡る。長さ二十六間といへり。右の方は遙に田の面を打越えて、山々連なれり。左は青海原にて、いと景色よろし。さきの年詠める歌、

山人ののりか渡りし鶴見橋千年も飽かぬ四方の色かな

生麥村の田家に、櫻二本たてるが、盛りなるを見て、

旅衣立出しより見そめつる櫻に憂さは忘られにけり

こゝに來て見る梢にぞしのばるゝ昨日の庭の花の色香を

など口すさび行くに、遠に見ゆる谷々の櫻、いとよく咲出て、匂ひ深くめでたし。今宵は神奈川の驛に宿る。十九日。(晴午後半陰)。

神奈川の驛を出れば、朝日の海原に映し、本牧の崎も見え渡り、たぐひなき景趣なり。輕井澤、芝生、追分など打過ぎて、程ケ谷の驛に至る。帷子橋といふ所にて、

夕すずみさぞな彌生の旅衣渡るに寒きかたびらの橋

ごん田坂にて、不二の眺望殊によろし、

四方山の嶺は麓に霞みつゝ雲井の富士ぞ雪に晴れたる

境木村には、武藏相模の境を記せる木ありて、傍に茶を賣る家あり。此所も打開きて遠く望まる。中村の燒餅坂を登れば、右の方に不二見ゆる。此所より十三里といふ。品野坂も又同し。一首の狂歌を詠みて人に遣しぬ。

燒餅の坂を越てもいやらしい品の坂なる婆々がやきもち

行きゆく程に、富士を向ひに見つゝ、有馬橋、吉田橋抔渡りて、戸塚の驛に至りては不二見えず。爰にて蜜の餡たうべぬ。元町橋といふ橋の左の方に、鎌倉の里にといふ道しるべ有り。大坂を越えて原宿なり。ふるや藥師といへるには右の方の道を行く。

影取村にて、

巡る日も午に近つく影とりの田中の櫻今盛りなり

影取の社は何所ぞと尋ぬれども、知る人の無かりければ、

いづくぞとさしても知らじ天にますげにかげとりの社なるらん

と戲れける。道場阪又は遊行坂ともいへる坂に至る。そこより少し此方に、小栗堂といふあり。此事は世に樣々いへれど、妄說のみにて確ならず。

藤澤山清淨光寺は、山門の造りいかめしう、右の方に見えたり。

茅が崎といふ所より、南湖村までの間、凡そ一里餘と覺しく、左右に松原立續く。あふさきるさ峰も田の面も見ず。只一色の翠のみ也。此あはひに高砂といふ所有り。皆砂地なり。

相模川近しとぞきく目も遙に松立並ぶ高すなの原

思ひやる綠も霞む高すなの松に出入る月の夜ごろを

松原を離れて南湖村に至り。其處にて休む。此家を立出れば、左に伊豆の山々。霞みて遠に見ゆ。今宵宿るべき、大磯の高麗寺山の松も見ゆれど、知らぬ境は猶遙なる心地ぞする。

町屋村に、町屋山梅雲寺といふ寺あり。橋も町屋と名つけたるあり。橋の左右畑なり。右の方遙に大山見ゆる。柳島に到りては、函根の二子山遙々と、二つの峰を望む。申の時過る比、馬入川に到る。總名相模川と云ひけるとなん。船にて渡るに、右には連峰煙籠め、左は原にて行末海に續く。(御代官江川太郎左衞門家來眞壁源右衞門出居て指揮す)

雨ふりの峰もかすみて相模川小舟さし渡す夕暮の空

馬入村を過れば、三四丁ばかりの松原左右にあり。花水橋は先にあれよと云ひし高麗寺山の麓なり。川の流左は二十丁ばかりにて海に出る。海山の眺望、尤も雅情深き所なり。

かゝるべきながめはあらし花は山水は海原花水の橋

高麗山寺の麓に、高麗寺と云ふ寺あり。行く手の右に、高麗宮と書たる幟二本建てり。此麓を過ぎて又松原に出る。木の間に江島遠く左の方に見ゆ。黄昏に大磯の驛に着く。今宵は空曇り、風肌を犯していと寒し。宿りける家の庭に、蘇鐵多く有るが中に、二丈ばかりなるが二本立てり。庭の木の間より、海の面渺々と見えて、浪の音近く聞ゆ。

沖つ波見ばやと思ひこよろぎの急ぎし物を黄昏の空

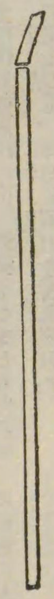
さえかへり衾かさねし冬にしも猶こゆるぎの磯の旅ねか

音にきく袖もぬれけり沖つ波枕ゆるがす大磯のさと

二十日（陰。）

此驛に虎子石といふ石の有りと聞きて行きて見るに、四五尺ばかりにて、大刀の疵とて痕あり。こは延壽寺といふ寺にあり。驛のはづれ山の上に、千疊敷と云る石も有りと聞きつれど、跡になりたれば見ず。濱邊に出れば、朝の海面の景色言ふも更なり。左の方に望むを近くよりいへば、鎌倉郡より三浦郡を見渡し、安房の洲の崎も夫とばかりに見え、右に遙なるは、伊豆の川奈村の岬を果にて、天城山の峯も烟の中に聳え。函根、足柄、二子山日に映して高く峙ち、屏風をたてたる樣なる麓に、眞鶴の岬一むら黑く見ゆ。小田原の城の櫓も、木立と麗しき中に現れぬ。洋洋たる波の中に、大島の煙立登る樣、とり〳〵の眺望珍らかにて、終日見るとも飽ぬ心地ならまし。濱は五色の小石胡麻石なと有て、從者の拾ひ集めたるが、いとうるはしくなん有りける。斯ても有らねば、濱傳ひ三四丁ばかりも行て、岡道へ入て、鳴立澤の昔を訪ふに、元祿年中に三千風と云ふ人のものせしとて、堂の中に西行法師五十一歳の像有り。傍の堂の中に遊女虎の木像を安置す。堂を守る僧の庵に到れば、西行法師の持ちける杖とて一節の竹の杖を見せける。實に古き物と見ゆる。

杖　五尺二寸



寛永の頃、飛鳥井雅章卿の短册一葉あり

やよひのころ
鳴立澤に
たちより
侍て

あはれさは　秋ならねともしられけり
しぎたつ澤のむかし尋ねて　雅章

小磯の切通しより富士は左に見えたり。中廻りの土橋を渡るに、富士は見えず。川の流れいと清らなり。此あたりに小動の森有りといへり。

國府新宿は往昔國府の跡なりとなん。右の方に石の鳥居ありて道より奥一丁ばかりに六社明神の社見ゆる。神さびて

尊き社なり。

鹽海村の並木繩手より富士を右に見る。此所富士の眺望又よし。

元梅澤村といへるに、小動濱もありとなん。左に吾妻山見えたり。

梅澤村に休む。庭に牡丹の花麗しく咲たり。此村は安康といふ魚、粟の餅賣る家多し。梅澤山藤雲寺といふ寺有り。

藤の大木有りと聞きつれども、行がてにして見ず。今を盛りの頃と知られて、名殘り多かり。村のはづれに坂有り。

坂を下りて土橋あり。此川は已より亥に流れて、亥の方半丁ばかりにして海に入る。又先より小さき土橋を渡り、押

切に到れば、大島も向ひに見え、眞鶴が岬いと近く見出せり。

前川村と國府津の間、相模伊豆の遠江の山、濃淡くまどりたるやうに海越に見え渡り、畫かく人に見せまほし。休

らふ邊の松風は、颯々の聲を鳴し、今日の疲れを暫し忘れぬ。

小八幡を過ぎて酒匂川に到る。此河は富士の裾野より流れ出て、又の名をまりこ川と唱ふと聞きければ、

まりこ河富士の裾より落くるや式正もなき雪消なるらん

此川は北より南に流れて、左一丁ばかりにして海に入る。幅四丁ばかり有り。今日は四瀨になりて土橋三つ渡せり。

連臺に乘り二丁ばかりを行く程、臺昇く者の膝の下三四寸ばかり水有り。川の半にて右に相模の山々箱根山見ゆ。左

は山見えず大海なり。又土橋を渡りて松原を行けば、左に大島三浦郡の山々跡に見ゆる。行く程に長さ一間餘り幅四

尺餘りの石橋有り。作り樣丁寧にして、さるべき社の前にも有りぬべき樣にて、野中には似つかはしからぬ橋なり。

一色村、右の傍に新田義貞の社あり。

山王原の海際を小ゆるぎの磯と云ふとぞ。山王橋は板橋にて、三十間ばかりなり。景勝よき所なり。橋を渡りて右に

一つの社あり。きら〳〵しく朱に塗たり。是は山王の社、星月夜社、井上宮となん。星月夜は三浦荒次郎某の靈を祭る

と聞けり。

小田原の驛の木戸あり。内に入ればいと賑へる宿なり。酉の下りに外郎が家の向ひの家に宿る。此家より十丁ばかり

そなたに海見えたり。

玉くしげ明れば越えん函根山麓の里に今日ぞ來にける

小田原の城主大久保のぬしより、町奉行某をして、紫蘇包の梅一捲給はりぬ。此所の名產にて、此梅と松魚の肉醬

なん賣る家多し。今宵もよた〻波の音に夢を破りて、故鄕の思ひあぢきなし。

廿一日（晴月皎然。晴天午後陰）

明行くま〻に小田原の宿を立出て此城の大手を右に見て、驛の總門を出れば板橋村なり。豐太閤の北條氏政を攻め給

ひし時、陣し給ひける大垣山を左に見て行く。里を離れて地藏堂の前なる橋を渡れば、箱根の山口なり。左の方を見

下せば、阿佛尼の鹽木流る〻と讀ける。早川の水三瀨に流れて、しかも石川にて、實に早川なり。流と流のあはひ此

所彼處畑あり。遙なる流は山の麓を囘り、此三瀨の流共に海に至ること近し。大海も見えて、いとも〳〵詠め深くこ

そ賞ゆれ。

入宇田と云所に長興山と云る黃檗宗の寺あり。爰を十丁ばかり過ぎて狹き溝に架渡したる石橋の中の石に、線香を供

し、烟立上るを怪しと見るに、神佛のけはひもなし。こは如何なるわざぞと問聞くに、是は名馬一にする龜と云名馬の足跡にて、

之を踏む者は惱み、又惱める者は線香を供へて祈ると言へり。げにも馬蹄の跡と覺しき形あり。

谷に下れば三枚橋といひて、長さ二十間斗の土橋あり。左右に手摺付けたり。山河の流れの樣、幽興言はんかたな

し。左に白山大權現といふ社あり。

右に三つ鱗の紋付けたる黑き門あり。其外に下馬の札を建てたり。門の左右は笹垣なり。見いれ深くゆかしければ、

如何なる所と問ふに、是こそ金湯山早雲寺とて永正十六年北條早雲建立せられて、五代の墳も此處にありといへり。宗祇法師の墳もありといへど、私ならぬ旅なれば餘所に過ぎぬ。

湯本の茶屋町とて、挽物細工賣る家居あまたあり。右の方遙の谷に藁屋見ゆるが、溫泉の在る處なりとぞ。

放光堂、曾我堂といふあり。側に石碑あり。

山路來て何やら懷しすみれ草　芭蕉翁

此所までは、山も險しからず。菫も濃紫に咲きたり。

しあげ坂、沓割坂など登る程に、薄紫の菫盛りなりければ摘せぬ。猪の肉を屠りて、擔ひ來りたるを見て、山中にて如何なる物ぞと見咎めて、若き從者の驚くもおかしかりき。猿橋澤に曾我の五郎の鎗突石といひて、方五尺ばかりの石あり。鎗の跡やうなるもの二所ありける。誠やらんいぶかし。二つ坂を行くに、右の谷を隔てゝ、向ひの山に一筋白く三段に落る瀧あり。瀧坪は見えず。蘆の海より落るといへど、水源更に分たず。此所より見ゆるのみなれば、忍が瀧と呼ぶとぞ。山のなかば瀧の下に、李花一樹躑躅はしく咲きて、春風に媚びたるは、西施も及び難かるべし。

誰にかも忍びが瀧のいとふとてかゝる深山にすもゝ花咲く

川端といふ所に家居聊あり。谷川を隔てゝ櫻二本あり面白し。すくも河に渡せる土橋を、すくも橋といふ。爰にも櫻一本盛に咲けり。都て此ほとりの谷川の景色奇なり。

女ころばしと云ふ坂を越ゆ。五郎の判石とてあり。坂を下れば千鳥橋なり。此石橋も丁寧なる作りざまなり。

大澤坂又は坐頭轉ばしとも云ふとぞ。此邊深山つゝじ盛にて趣き殊によし。

畑の宿、家數あまたあり。此宿も湯本と同じく、挽物細工の品を賣る。休みける家の清水に、緋鯉なん多く放てり。斯る山の中に有るべき事とも知らず。徒歩にて登り來りける從者は涼しき樣心地よげなり。

さいかち坂は、さいかち八丁と言ならはせりとぞ。行盡す處、右に小田原の海を見渡し、曲れば左に、愈よ海の面廣く望まる。縱横二丈ばかりなる石あり。こは沓掛石と名づくとなん。

かしの木坂は、かしの木を裂割りたるやうの、赤き小石道なれば、斯く云ふといへり。坂を登らんとする處に六本杉とて大なる杉裂深く並び立てり。

猿滑りといふ坂より又小田原の海能く見ゆる。海越に、おとつ日過ぎたりし大磯の高麗寺山も見えたり。

銚子口も坂の名なり。此の所に風穴といふあり。一つの大なる石ありて、それが銚子の口に似たるより、斯はいふなりとぞ。

老平といふは、暫しが程平なる芝路にて、小萩の古枝とも言ひつべきが、あまた生たり。右は文庫山の麓にて、右に近く二子山の尾上を見る。芝山の内に岩をまきちらしたり。おたま坂未だ二子の麓なり。七間石あり。

白水坂に天下石あり。此の坂の名は、雨多く降る時の樣の名なりけりとぞ。別て險し。都て此あまたの坂を登るに、駕舁く者の疲れぬれば、友を呼ぶにお替り〳〵と言ふもおかし。駕の中にても勞なきにしもあらず。

八町平は、此山の峠なり。先の老平と同じく芝生なり。右の方に二子山駒形山を見る。實に八丁ばかりの平道とぞ覺ゆる。下り坂にて始めて蘆の湖を向ひに見る。

街道より右に入りて朱の鳥居あり。爰より徒歩にして、湖を左に見て岸に添ひて行く。箱根權現に詣づれば、いがきの梅三本今を盛なり。

春風もさそはざらなん箱根山神のいがきの梅の盛は

袖さゆる箱根の神の廣前にむつき覺えて咲る梅がえ

社の前に家居十四五軒あり。腹赤といふ魚、軒端に下げて賣る家あり。大なる釜二つ並びて、雨露湛へたり。何れも

徑り七尺餘もありぬべく見ゆ。こは頼朝公の富士の牧狩の時の物と言傳ふと、所の者は言へり。釜の周りに鑄付けたる文字あり。從者をして寫さしむ。

大筥根山宋福寺湯釜一口。滿山大衆別當法橋上人位實。文永五年　戊辰十一月十二日

又一つには、

本鑄冶大筥根山宋福寺浴堂釜一口。奉爲天長地久成願圓滿侏甲東靜謐武家女祿別當玄脹和尙位陞實。並滿山大保奉倚冶之也仟　弘安五月一日。大工豆州礒部康廣

この文に據て見れば、惟康親王の鎌倉にいまして、北條時宗の執柄せし時の物なり。富士野の狩より文永五年は七十六年、弘安元年は八十六年後なり。童諺の採るに足らざるを知る。

又權現にある撞鐘の文にいふ、

大筥根山鐘銘並序

當山者蓋山嶽之神秀者也

孝謙皇帝御宇天平寶字年中萬卷上人草創得地三所權現松瑞並甍參降鎭坐餘五百歲鏡被十二州衞護之德外現風馨周福之願內證月明希爽之道心言叵及奧若去前協冶之曆仲冬嚴甫之天回祿成俳祠檀欠是以便啓土木之殊功復瑞之。雀光鑄華鐘專滿個器宜達逡音遊迦求垂勝利

於之願行小銘

○○○○鑄功新馨○曉夕韵徹○○高和風

底遠證、、、、、、芥猶年、、、、、

永仁三年五月日

大工竹意權頭礒安弘

是は又釜よりも、十年餘り後、北條貞時執柄せし時の物なり。文字確ならぬには圈を記しぬ。別當の坊にまかりて、曾我五郎時宗の太刀二振。短刀一腰を見る。又壽福寺方丈へ、時宗の送りたりといへる文あり。三行にかきたり。

夜前之隣火忽消。貴寺安穩。悅千万。委曲

可申而謁。恐惶謹言

時宗

壽福寺方丈

とあり。何れも箱を二重にして秘め置けり。如何なる物かは知らず、古筆とは見えたり。此の文に記せる時宗は、俗諺志にいへる北條なるべしやと思はる。

湖を廻りて石の鳥居を出で、さいの河原と唱ふる所、家居少しあり。銅の地藏水際にあり。鉦打鳴して　いと哀れなり。爰を過ぎて新屋といふ宿に到り、程なく行きて關に到る。番の武士いかめしう固めて、弓鐵砲などかざれり。

いつよりかこゝに箱根の關するて明暮安き世を守るらん

關を越れば箱根の驛なり。山中とも覺えず賑はゝし。望嶽亭に休む。湖を遙々と望むるに、右は藁葺の一つ菴を越えて、權現の森續きに高く、駒形山を近く望み、東より西に山續きなり。其山のけはひ、如何なる工が削りなしけん、芝の色松の綠、隈々の模樣、出崎々々の姿の面白さ、山も湖もげに殊更なる勝景言はん方なし。雲掛らねば、左の向

ひの山の上に、富士も見え侍り。湖に映る景色は、二無く覺えけりと物語るを聞くに、如何ならんと慕はし。

月雪の折からさぞな箱根山春の詠めもふかき水海

山めぐり四方の渚の目も遙に長閑に見ゆる蘆の海面

向ふ坂とて又登る。赤石坂、風越といふ坂を越えて、相模と伊豆の境の木あり。茨が平、胄石坂、石割坂をくだる。中ばより伊豆駿河の海見ゆる。

いづの海や沖の小島とみえけるもこゝにやあらん石わりの坂

大枯木、小枯木といふ二つの坂をへて、山中村に到りて休らふ。此村の入口に北條氏勝が籠りし城跡ありといへど、小さゝ茂りてそれとしもわかたず。湯本の此方すくも橋にて櫻を見たりしまゝにて、此間は梅のみなりしを、此家のうらに櫻いとよく咲きたり。袖の寒さも少し忘れけり。

箱根ぢや山中むらにさく櫻などかく色の深く見ゆらん

富士見平は又たひらなる道にて、名におふ富士も正面にあざやかに見ゆ。けさのほどの空にては、おぼつかなく思はれしが、よそに雲はありながら、いとよく晴れたるぞ嬉しき。こゝより麓まで七里ばかりありなんといへり。

折しもあれ雲もかすみもなか空に詠めうへなきふじの高根か

上長坂にて遙に見ゆるこそ、三保の松原、田子の浦にて侍れといひければ、

けふぞ見る三保の松原田子の浦はるかに霞む波もしづけし

笹原村、下長坂、みつ屋、左に題目堂あり。小時雨、大時雨、法花などいふ坂、一の山を過ぎて塚原に村里あり。初音が原は鶯の鳴きそむる故の名ときゝて、

うぐひすはなかねどそれと名に聞くを初音が原の春の暮方

舟くぼ、今井坂を里の人はあたご坂といふ。坂の下りに五本松あり。いと老木なり。かうりむりせさせまほしき者なり。愛宕の堂。坂の下に有り。

河原がへの橋、かんつ橋を渡り、平道なり。黄昏にもなりぬれば、三島の明神には明日詣でんとて、三島の驛に宿る。今宵は去年の多釆邑にものせし從者澤渡盛裕、武藏へ下るとて、此宿に宿りぬとて來りぬれば、何くれの事ども物語して、故郷の言傳など言含めぬ。よき折柄なれば、友どちの許に箱根山の菫を送るとて、添へて遣しける。

箱根路にけふこそは摘めつぼすみれ薄紫の色を慕ひて菫菜の色も山中村過ぎては又薄からず。

廿二日（雨。）

よべより雨降り出て、つとめても猶止まず。宿を出て先づ三島明神に詣づ、門を入れば池あり。石橋を渡りて、二王門の内に樂堂あり。石の鳥居の彼方に社有り。社頭廣くして、いかめしく莊嚴なり。社に詣でゝ光廣卿東行の時、伊豫の國にて能因法師が詠みける歌を思ひ給ひて、今も三島の神ならばと詠み給ひし事など。又思ひ續けて、

今も又三島の神と聞くからにせきとめたまへ天の川瀨を

晴れくもることをうけひく神ならば旅の衣をぬらさゞるらん

いがきの櫻は散りて若葉さし、かへでも許多あれば、綠の色麗はしく、雨にはえたり。花紅葉の頃にぞ思ひやられぬる。社頭都て物古りて見ゆる。いと尊し。暇申し罷出て、鳥居より向ひ、街道より左りの方の道に入りて、市が谷村あり。中原と云ふ野中、右にまとろみの稻荷の小社あり。此あたりは家居遠き田畑なり。右は細き流れに添ひて行くに、左の遠方村里の杜の木立打續くが上に、箱根などの山々雨に烟れる景色、言はん方なし。

行く程に右の方に、かのあたり千貫樋なりといへり。こは此國より駿河へ水を通はする爲とぞ。往昔駿河より千貫を

以て謝したるよりの名となん。駿河と伊豆との山の隔りたるあはひより大海見えて、海越の遠山出崎波に浮み、雨のうちに霞みたる奇景たぐふべくもなし。

中島村。村の中に蛇が橋と云あり。長さ十四五間。切石にて作りたり。川は南より北に流るゝ。だいだ、まみや、野中を行けば、遙かに蛭が小島を東に見、右に古奈の溫泉は、遠のそこなりと敎ふ。又韮山の古城の趾といふを、左に見て五六丁行けば、田方郡茨木村なり。村中に天王の社、辨天堂、左と右とにあり。

村續き四日町村、寺家村、中條村と里續けり。此三つの村なべて北條と云ふといへり。村を離れて野に出れば、右の方に尉山、岩ほに疊みて高く立てり。誰か造り成したると覺ゆ。いと目立ちたり。半ばより雲の出る見ゆ。

峰續く田方の郡分行けば雲の衣を重ねてぞきる

右に見ゆる竹一叢のあたりなん昔北條時政の住みたりし所なると聞く。

南條を過ぎ、田中村、横山坂に懸る。峠より大久保出雲守敎孝の山中の陣屋見ゆる。下れば野なり。

六角堂。ごぢの阿彌陀。

村の中、右に深澤明神あり。年毎の睦月の望に、つゝ粥を供して、五穀の豐凶を占ふ事有りとなん。

めしこ村、幅六七間ばかりの山川の流あり。土橋を架けたり。小坂あり。此ほとり米を搗く水車あり。吉田村、じやうふう寺といふ寺の前を過ぐ。

大仁村。先に見し尉山の麓なり。峯近く見えたり。此村に到るまで、都て雲の出る山もとなり。今日は雨故なればなるべし。

此村の杉村太次右衞門といふ者の家にて餉飯たうべぬ。今日はなべての花を見ざりしに、庭の山吹露深く咲亂れ、牡丹も盛りに山椿さへ雨に色添ふさま、旅の憂を忘るゝばかりなり。

言はぬ色は言ふにまされり心をも深く置きける露の山吹

ふる雨のうきをもしばしわすられつ色深見艸深きながめに

山吹の枝を手折り駕に挿しぬ。

左に八幡の社あり。

狩野川は辰巳より戌亥に流る。水上は天城山より出て、下は駿河に到る。くり舟渡しとて、向ひより此方に綱をはへて舟の舳に竹の輪をつけて綱に嵌め、艫にて棹をさすなり。川の央にて右に駿河も見わたされ、左も廣らかに見ゆ。いと興あり。渡りてあなたの岸に從者の渡り終るを待ちつゝ休らひて、元來し方を見やれば、水晶山と云へる岩山高く立てり。南の麓の先に辨天の堂あり。朱の鳥居水に映じ、此山の詠め殊更に見ゆるが上に、遠近の峯濃淡く霞みて、兩岸の此方彼方青柳の糸操返し。春雨にみだるゝ粧ひ、又や見んとそ立うかりけるに、從者は渡り果たるをも知らず、行先も遙なり、いざやと強て數多度促されて立行く。

狩の川の渡瀨のなはの長き日の暮るもよしや舟とめてみん

綱手引くかのゝわたりの春雨に濡て榮ある四方のやまのは

此川を堺にて瓜生野村なり。村里離れて畑道を行く。右は山近けれども、峽より出る雲も僅にて、先の山々にたくらぶべくもなく晴やか也。

瓜生野と立野の堺に、先の狩野川の流れあり。東より西へ流る。爰にてはなめと川原といふ。いと〳〵面白かりければ、駕を出て從者二人三人打連て、道より二丁ばかりも脇へ到り、岸根の岩角に立て望むに、石川の流灣曲有りて、彼方此方へ流れたり。岩ども多く、岩にせかるる水音高し。岩の上に觀音の小堂あり。砂利濱の景色、杜のこたち、竹むら藁屋の一つ二つある。峯の松。川添柳。孰も目留りて、初め見し所よりも、又一きは面白し。

雨かすむ山と川とのたゝずまひ目にも立野の水の白波

愛宕山の麓を行く〳〵も顧して名殘多し。後々も此川を左に見て行くに、或は見え或は見えず。川の景色の樣々にかはりて、雅情餘りあり。此村里にて暫し休らふ。庭に櫻あり。

雨そゝぐ立のゝ里の家さくら色こそまされ今日の初花

大平村に瀧あり。瀧源寺の瀧。又は朝日の瀧といへるとなん。數十丈の峯より落るが、道より二丁ばかり隔りて見るに、幅六七尺も有りなんと見なされ、音も聞えぬ。此山の上に金毘羅あり。麓に高根權現あり。又瀧源寺といふ。ほろほろのすむといふ寺ありとなん。大木の櫻今を盛に咲滿ちたる匂ひめでたし。

落たきつ瀧つ岩ねの岩波とこの間に見しは櫻なりけり

少し右の方に老たはらと云ふ野あり。畑の中に八幡の杜あり。

坂を下る。

青羽根村。又山川の流れに添ひて登り行くに、左の遠近に、幾度となく見えつ隱れつす。

六七間もありける土橋を渡りて小坂にかゝる。あふさきるさの峯、烟籠めて見所あり。次第〳〵に登り行けば、川の流れ數千丈の谷に臨めり。

月が瀬村は箕を多く作りて出す村といふ。

此あたりは都て峯々見えて、谷川の流れ大なる石の石川にて、岩切通し行く水の流れは淺し。幽興は尤も深し。

岩なみはうさぎや走るとばかりにみる月かぜの山川の水

風間山は目立ちて立てり。麓を流るゝ川音近く聞ゆ。

坂を下りて土橋を渡る。此あたりの樣都て山水の岩傳ふさま。前の如し。

門野原村の村長の家に至る。

此所を出て坂あり。上り短くして下り長し。

嵯峨澤川は長さ九尺ばかりの橋を渡りて、十間餘りの程は大きなる砂利を傳ひ、流れを横樣に徒歩渡りなり。こほこほさは〳〵と傳ひ行く。左右には大きなる石の二つ三つ有るが、奇を窮めたるさまなり。先々も狩野川の流にて、こも又然なり。此ところわきて幅廣し。渡り果れば坂を登る。

一の山村の土橋を行き、登り坂にて湯が島村に、申の時過る程に宿りぬ。此の宿は軒端の山いと近く、空を見ず。今宵は曇なり。

此所の名産椎茸を出す。

村より北五六丁に溫泉あり。

廿三日（雨。午後快晴）。

今日も又雨包みして、夜の明るを待ちて立出るに、やがて天城の山口にして、自から登りに登る道也。程も無く雨歇みぬれば、朝ひこの影雨後の峰に映じ、心もともに晴やかに、喜ばしく見遣らるゝに、其麓に谷川二筋音立てゝ流れぬ。足の下にも山水の音すさまじく、彼方此方に聞ゆ。猶も行くに、村里は常のやうにて、右の方は數十丈の谷なればば、山中なる事を知れり。

左は山の岨道にて、右はさきの如く谷川音立てつ、谷より向ひは杉叢茂りあひたるが上に、峯々は日影長閑に映りて晴やかなるに、新樹もよべの雨の名殘しるく、一際色うるはしく見えたり。

山根に菫咲きて、山路の憂を慰む。此の山中も薄紫に咲く。

南を指して行くに橋を渡る。此れまでも山川を眼下に見、又は音を聞き、すべて右の方に遠くなり近く詠めける。左

は山を傳ひて來れり。

橋を渡り川岸に添ふ。曲灣の所、川幅廣くして、大なる巖二つ立てり。川岸を離れて岩垣に蔦の若葉掛れるも、宇都の山を思ひ出でぬるものから、今日なん初めて知らぬ旅人一人此所にて出逢ひたり。

みるは夢逢ふは現か天城山餘り稀なる人目なりせば

峰に一段の瀧あり。これは雨降らねば落ちずといへり。物さびて珍らし。

又川の岸を行く、左には岩にて疊める、山に添ふ六尺ばかりの橋を渡り、十歩ばかりにして、又谷川を千仞の下に見る。

又山川の岸傳ひなり、此ほとり流れ細し。左の澤に山葵多く生ひて、四つ五つ白き花の綠葉の中に咲きたる、優しく見ゆ。

右の谷にいと細き流ありて、音は雷の如く漲り落つるあり。やがて一つの山を越れば、東より西へ流るゝ七八間ばかりなる山川あり。昨日の雨に水增していと急流なり。矼石を集めて歩としを渡るに、駕をさしたる者躓きて、駕も斜めに成りぬれど、取止めて辛うして向ひの岸に到りぬ。從者も各所の者の肩に乘りて、渡り、果ぬれば心落居ぬ。

一丁餘り坂を登れば、廣濶なる所なり。左右の山は艸のみにして木立見えず。其所を過ぎて、登ると無く漸く登り行けば、右にじやうれんと云村あり。又一丁許行けば、萱野新田と云村あり。斯る深山に有るべくも覺えねども、村里は猶尋常の如し。此の所に到るは辰の時ばかりなるが、霧雨の降るが如し。今日の山越、雨にては如何有るべきと思ふに、こは雨には非す。雲になん有るべきと人々の云ふに、

湯が島を朝立出て天城山雲の中道越て行くなり

此村を過ぎて廣き原あり。皆萱野にて、平地十四五丁あり。尤左も右も山見えたり。此邊なゝかもと云木の芽の萌出

たるが李花に能く似て、初は花なめりと見しを、木の芽なりと聞きても、猶疑ふばかりなり。暫し行けば、左は山に添ひ、右はこゝも廣き野にて、谷を隔つる山々の樹々繁く、谷川の音遙かに聞ゆ。又暫行きて、櫻一樹若葉茂りて花僅に殘れり。三四丁ばかり行きぬと思ふに、左右木立茂りて、日影も漏らぬばかり小暗き岨道なり。左は山高く右は谷深し。道の幅はやう〳〵往來するばかりなり。いと山深く入りぬる事とぞ覺ゆる。小逕の邊りに赤き鳥居立てり。額に山靈社と書て小社あり。こは山の神を祭ると云ふ。何なる事を知らず。此邊殊に山葵多し。

久方の天城におふるわさび草辛くぞ過る山の岨道

此處彼處山水の流るゝを踏んで行けば、猿滑りと云木の、尋常に見ぬ大きやかなるが許多あり。其外世に知らぬ木ども〻茂り合ひたるに、蔦日蔭の蔓も梢に懸りて、幽邊餘りあるに、雲雀の聲のみいとすみて、淋しく聞成されぬ。馬酔木の花盛なるを見て、

わけわぶる袖にとめなん天城山咲るあせみの花のかをりを

天城やま心なくさに咲くあせみ花めづらしく香もふかくして

香は桂花に似たり。又狂歌一首を詠みて、人々に戯れける。

引く駒は酔るやいかにあまぎ山越行く我は汗身とぞなる

稍ありて小暗さも薄く成ぬるほとり谷川を見いるゝに、いと音高く流れぬ。

坂を下り川岸を行き、又岸を離れて行けば、大川端といふ谷間なり。此所にて休らふ。此の所はげにも川の幅廣くして清らに流る。爰にも山椒魚多く居て、生きたるを呑めば、積聚の藥になるとぞ、此あたりに世に彼岸櫻と唱ふる如くにて花は櫻に似ていと小く、一種別の櫻、今を盛に咲り。此邊の知れる者に尋ねければ、米櫻又は粉米櫻といへり。蕣を掘て持たせぬ。總て此山中石斛蘭あるは、萬年草と云苔抔石に生たり。

是までよりは増りて道嶮しと聞きければ、此處よりは徒歩よりゆく。少し行けば又坂を登る。げに聞きしに違はず。そばだちたる細道にて、足をためらふべき所もなく、老たるも若きも、皆黒もじと云木を、杖にきりてすがりて登るに、わり無く苦しければ、坂の半ばかりに立止りて顧すれば、遠く大見郡の山見ゆ。傍は米櫻數株盛なり。

くも掛る嶺に一むら色わきて見ゆるや花の梢なるらん

汗出で咽渇きて堪難きを、猶念じつゝ登る程に、此山の峠といふに至りぬ。此坂の道の程を問ひ聞くに、登り道一里と云へり。少し下るに、雲霧深くして咫尺も見え分ず。其處は何處ぞ、彼處は海なめりと云へば、海にて侍るなど答へつるも、猶越行く方の峰なれば、其處に至る程に、さきに答へし者もともに笑ふも又おかし。猶下りて山岸に添ひて、谷を巡り行けば、いとど雲深くして、山か谷か見え分ず。谷を隔てゝ、元來し向ひの峯は、一木大きなるが、一叢濃く見ゆるにぞ知られぬる。道は一人つゝ立て歩み行くに、跡に從へる從者も、五人六人は見ゆれど、其跡は河音のみ聞えて、姿は其としも分ず。次々に從ひていち跡なるが、向ひの山岸をたどりくるは、菅の小笠のみほのかに見ゆるばかり也。

こし方は青海原と見ゆるまで霞む天城の春の山越

峠の茶屋とて、藁葺る一つ庵あり。見入浅くいとかすかなる世渡とこそ見ゆれ。庵の内には入るべきやうもあらざりければ、此邊に圓坐など敷て休らひ、上中下今朝湯が島より持來りし割籠を開く。此庵なん跡も先も、村里には遥隔りぬるが、爰に斯して年月を送るにやと、從者の問ひけるに、此山中には猛き獸抔多く侍りて、人の住果つべき所には侍らず。只往來のしげき折からをかうがへて、此二里ばかり先なる梨本の村より、壹の程のみ通ひ來侍りぬ。今朝も出こし比は、狼の足跡多く見えて、未だ人も通はざりきと、あるじの女語りぬ。いとも〳〵心細げなる有様なり。猶山にてもといひけん人も、いかゞ住みわびぬらんとまでぞ思ひやらるゝ。此處は雲烟も無く空打開きて、日影

も珍らしく見ゆ。[illegible]を半過ぎて立[illegible]坂を下る。或は短く登りて長く下り、或は谷川に添ひ行くこと先々の如く、又は山水を渡る事多くして行くに、丸木橋のかゝれる處、岩波高く落ちくる流れ、岩多き山の立る姿、雅景のながめ殊更なり。爰をも過て、南の大川端と云ふに至りて休む。日影にうとき杜の木蔭なり。炭燒く設けしたる石垣ありて、川はやんこと無きそのふにせき入れてしつらへたるやうに、中島を繞りて流る。丈いと高き杉五もと、緑こふかく立てり。猶も〳〵山のがけ路の狹きを分行けば、打開きたる芝山の麓に出づ。右の方は萬仞の谷に山川の流れ長く見ゆるに、峯に映る夕日の影鮮かに匂へり。此處に暫し足を停む。

此芝生を行過ぎて叢祠あり。疱瘡の神なりと云。傍に大きなる石あり。高一丈八尺ばかり、幅九尺ばかりなり。こゝよりしては道も安らかに成りぬと聞けば、駕に乘りて行くに、又一つの磴道を下る。其後も坂を下る事數多度にして、其が中に一つの谷に瀧を見る。幅八間ばかりに落る。長さ十尋餘もありなんと見ゆ。下よりして仰ぎ見まくほしかりき。辛うじて梨本村に黄昏に着きぬ。村の入口に山川流れて板橋をかけたり。

今宵宿れる家の造りいと古びて、柱も手斧にて削れるのみにて、太さ四方とも曲尺にて七寸一分なり。いつの頃より住みけると問聞くに、上棟は慶長の頃し侍るまゝにて、其後は内の取繕ひばかりもしつれば、新らしき柱も交りぬと云ひき。又棚には熊毛の古き靫を飾れり。中に矢もあり。弓槍も持傳へ侍るとて見せければ、概略を寫しぬ。

弓　二張　白木　七分　重籐　六分（比弓半より折れたり）

矢（羽なし）　七本　（内五本は鏃なし）

鏃あり。二本は鏃なし）

武士の後ならましと問へば、稲葉越前守とて、大阪の合戰にも出たりし其末にて、今稲葉善左衞門と申す百姓なりと答ふ。此外の事ども尋ぬるに、露知らずと云へるぞ口惜き。

廿四日（晴）。

この家を出て十町ばかり左に、竹むらあるが、小鍋の溫泉のある所と聞く。行く程に小鍋村に到る。小鍋と云へるは小名にて、此邊惣名を川津と云ふ。小鍋橋十間ばかりの板橋なり。

又五間ばかりの土橋を渡る。橋より右に義朝山神宮寺と云寺あり又左に小瀧あり。

小鍋坂、登り下り十三四丁もあるべし。此所を過て谷に畑あり。昨日よりは見ざりき。

小坂を越て北の澤村と云ふ。道の邊りに大なる楠樹あり。七抱へ半ありといふ。

茅原野村、げに茅原にて、山と水の詠めもえんに、打開きたる所なり。此處までは自ら下りになりにけるが、爰にてなん眞に下り果ぬるとぞ思ふ。湯が島より此の方、軍荷をも人の脊に負せて來りしを、爰にて初めて馬に負せたり。此野に暫し休む。村里は遠くて見ず。太田攝津守資始の采地なり。

箕作村、爰も又里離れの野路なり。左に米山と云あり。砥石を産すと聞けり。米山寺藥師を安置す。

落合村。

河内村、此處までも石川を見もし見ずもし來りつるが、別て川の幅も廣く、景色の面白きに木蔭より鮎釣る漁翁の、此所に一人釣を垂れ、彼處に一人釣竿を持ちて立るあり。畫にもかゝまほしく思えき。猶此川を右にてし岸を行く、に、向ひの岸に砂利濱二所見ゆ。川上は森の下影なり。

鮎をつる河内の里の石川や行く〳〵見ても猶飽ぬかも

廣らかなる河原に出れば、向ひの岸は岩ほ許多に山の綠をうつして、川上は山間より出て、下は廣く見えたり。風景の勝れたれば、暫し佇むに、岩に乘りて網打つ漁者あり。守らひ居たれば、やがて魚一つを獲たるも興あり。假初に架渡したる板橋を渡り行くに、たよ〳〵としぬれば、淺き流れも恐ろしく覺えぬ。左の方に高根山とて、一際高き山あり。峯に地藏菩薩の堂ありとぞ。伊豆の海を渡る舟どもの、西東も知らずなりて惑る時には、此地藏に祈りを掛れ

ば、請引き給ひて忽ちに火の光を現して、それと知らしむることとなん。奇瑞限りなしとぞ云ふ。此村はなべて山々左右に打開きて、石川の岸に添ひて來しに、川幅十六七間もや有りぬらん。流れ清くして、所々に瀨々の白波沸返り、怪岩ども多く絶妙なり。

暫し行きて村界の板橋を渡る。此川も又廣くして、趣いひ知らず。さき〳〵の流よりも猶清らなり。過れば中の瀨村なり。家居も軒續にて、此程の心ならひには珍らかに覺ゆ。此の所に下田より迎に出ける者も居けり。

餉たうべて立出て行けば、又廣き砂利の河原あり。川は三瀨に流れて、二所に板橋を架たり。渡り過れば本郷村。小名をたこうまと云所に出づ。こゝも川を左に添ひ行く。川の岸なる若葉さす榎の下に傾城塚あり。右なる賤が垣ほの内に、大なる蘇鐵あり。

下田に近き左の山の麓を中村と云ふ。蘭を産すと云へり。右は未だ本郷村なり。下田富士と云ふ山を見る。此奥より御影の石も切出すとなん。

武山と云ふは目に立ちたり。昔長曾我部某が、此山に石炮を居ゑて、彼方に見ゆる城山に、北條氏直の家臣清水上野介某の籠りたるを打ちて城を落しぬと聞きぬ。此山の下に波浮山權現の社あり。田中に石の鳥居あり。

道見橋を渡りて下田に到れば、先づ新田町より入て家續きいと賑はゝし。町數二十一あり。其内二町は未申の方の山際なり。六町は辰巳の下田川の岸なり。

總て此ほとりの浦は、予があつかれるなれば、是所に居て取賄へる爲に、組の者を在勤せしむる處は、城山の麓に在り。爰に至りて例の事ども終りて、大浦八幡に詣ず。此社に傳來せし頓阿の作と云ふ人丸の像を拜す。大浦の湊に元御番所跡なりと云ふも、今は麥畑となりてあり。湊の右の崎に、元燈明堂は有りけるとなん。暫し休らひて、八重の鹽路を見渡せば、神津島、新島、みこもと島も波に浮び、奉霞乞ひ深く、眺望して立歸る道すがら、元御船屋跡、こ

れも麥畑となりぬ。享保六年浦賀に移さるゝまでは、此處に海關を居ゑさせ給ふければ、此古き跡どもゝ在りけり。それより高札を一見して、大きなる岩山を切通したる道を經て、坂下町に下り、大工町鈴木屋七兵衞と云ふ者の家に、未の刻ばかりに到りて宿る。今日は組の同心ども、此處の村長、漁船頭、廻船問屋、下田八幡、大浦八幡の神主どもにあひぬ。其外近き浦わの村長どもは、追々來りぬ。何くれと事繁し、村長より鰹節白椎茸なと贈る。明日は猶予が預れる此あたりなる三つの浦を見巡らんと申し含めて、閨へ入りぬ。

近村　十九　須崎村　柿崎村　外浦村　白濱村　谷津村　濱村　見高村
稻取村　片瀨村　吉佐美村　田牛村　湊村　手石村　下流村
大瀨村　長津呂村　入間村　妻浦村　子浦村

廿五日（晴。午後陰小雨。初更星光放）

先づ伊勢町より池の町に出れば、みたらしの池あり。直に行きて下田八幡に詣づ。宮居物古りて見ゆ。後に戻りて、城山の麓なる元御役屋敷跡を右に見て、辨天の社の川岸より船に乘りて、柿崎村に渡る。凡そ三十二三丁ばかりの渡海なり。爰を下田の內湊と云へり。沖の方に、赤根島、雁金島、夷崎、犬走島を詠め、和歌の浦は島影なれば見えず。行末は靑海原に帆懸て走る船どもゝ見え、又汀の方は武山より續き、麓の眞砂海士の家。鵜島。鷺島と云ふも其品々にして、雅景の筆に盡しつべきに非ず。

かみかかみにいつなる物をいかなれば呼ぶは下田のうらめしの名や
なみまより匂ふ朝日の赤ねしまありてぞ過る船の通路

柿崎より一つの山を越えて須崎村に到る。元御番所跡と云ふ小高き所あり。是處にして湊のよそひ見渡し、沖を望むに、爰よりは新島、利島、又うとまと云ふ小島見ゆ。神津島は今日は霞みて見えず。

須崎村に至れば、此所も漁村にて、湊江の風情いとよし。須崎明神と云ふあり。鳥居に兩社大明神、八十九翁書とあり。名は讀めず。社に詣づれば、社の脇に小社四つあり。神體を尋ぬれど、村長も誰も知らず。社の後に大樹あり、土人あを木と云ふ。組の者は島楠と云ふ物と云へり。前に柏槇の大きなるもあり。

外浦と云所に至る。濱邊に八幡の祠あり。濱は皆白砂なり。此湊は岩ども多く波間に見えて、殊に宜し。遙に大島正面に見ゆ。外の島々は見えず。此外浦も漁村なり。

柿崎へ戻りて、日和山と云ふに登る。草木も無き赤き石山なり。大海の眺望言ひ知らず。こは文化十二年十二月。唐船の漂着せし折から、公に沙汰して、唐人討飯愿をせし處にて、其ふし唐人も景趣の勝れたる由云へりと聞き。

日よりやま晴なばいかに勝るらん諸こし人も愛し海原

山を下りて柿崎村に到り、板橋を渡りて、鷺島の辨財天に詣づ。岩屋と云ふ洞もあり。此島よりの詠め、又今朝舟中にして見しよりも宜し。同し所の窓が濱に到れば、豫て設したる休らひ所あり。此濱はいと廣くして、海の面を見渡すに、今日の興にとて、所の漁者どもが、地曳網と云へるを掛たるを、次第〳〵に寄せ來るが、稍待たれけるに、やがて網をあぐれば鯛鰈其外魚多く獲たり。

柿さきの窓が濱へは立そうき鯛曳くあみのめづらしくしく

上下寄集ひて珍らしと見るが中に、春雨の降り出ぬれば立出て、歸さは小山を經るに、草叢の彼方此方に、愛つべき石ども多し。又右の方にそばだつ山々にも怪岩多し。總て此邊の景色言も盡きず。下田川を渡りて、大工町なる元の宿に歸りぬ。所の者にも夫々祿與へて、獲たりし魚ども調して、誰も〳〵酒呑み醉ひて臥しぬ。

廿六日（晴。午後風。）

曉に起出て見れば、雨後連巒閑ニ曉色一海天落月輝ニ松梢一と打吟じつゝ、明放れて下田の宿を立ちて、下田川を渡り、柿

崎の窓が濱邊を過るに、朝の眺望昨日に勝れり。山を越えて白濱坂を下るに、羊躑躅の色濃く咲きたるも優し。

岩つゝじ紅ふかく咲てけり白濱坂の春の芝生に

此坂より。今宵宿るべき稻取崎は、空行く月の末の白雲と詠みけるも、思ひ出らるゝやうに、波路の果に見えたり。濱は白砂にて、雪の降りたらんが如く見やられぬ。坂を下りて濱を行く。打晴れたる所なり。

旅ころもぬるともいざや白濱の波打よする磯づたひして

行盡す所。白濱明神鎭坐の山なり。祭りは長月廿日なりときく。此所よりは柿崎白濱の堺の、出崎を離れて新島見ゆる。打越に雲の如く三宅島見ゆ。うとま利島いと黑みたり。又左の方に大島烟の立登る見ゆ。此明神の山の後に、御釜と云ふ岩三つあり。げに能く釜の羽に似たり。洞ありて底に濱あり。潮干には人通ふと云ふ。濱傳ひ色々の石ども拾ひつゝ歩み行き、坂を登れば、神津島見えて大島見えず。又下りて濱に出れば、六つの島殘りなく眺められたり。

繩地村、麴坂と云ふは、七廻りばかりに折れて、廿丁餘りも登る。いと苦し。山に掛りては海はたまさかに山の間より見るのみなり。此山の名を聞けば、はつつけ坂と答ふ。そは登り苦しきまゝに、俗に呼ぶ名ならん。何とか云ふべしと云へば、中山と云ふといへり。こは繩地と川津との間なれば云ふなるべし。鶯の囀り珍らしく覺えて、

中山のなか〳〵道のくるしさも忘れてぞきく鶯の聲

山を三四丁下れば、左は手いれ山、せうぶ澤、右は海面を望み、六つの島も殘り無く見え、右の神津島、左の大島は行くまゝに出沒せり。松の木の間より、磯邊に海士のかつぎするも、遙に見下されて、寄來る波の岩に碎くる景色興多し。十丁ばかり下りて、賴朝卿の力石と云ふあり。稻取の崎も見付けたり。此峠より川津濱村なり。川津は物名にて、濱村、谷津村、峰村、田中村、根岸村、澤田村と分てり。此所に谷津村の村長出居たり。

坂を下り果て濱路なり。川津川は水上天城山より出て、此所三四丁にして海に入るなり。船橋（漁船十艘横さまに並べ、繩にて繫ぎ合せたり）を渡り過て村あり。稱念寺と云ふ寺に休む。菴に木瓜と抱茗荷の紋の幕打て有れば、故あるにやと尋ぬるに、本尊の阿彌陀佛のみにして、外に何も侍らずと云ふ。

又海岸の山を行くに、松立並ぶ綠の木の間に、砂利濱の所もあり、芝生の山長く横たはりあるは幾重の海嶠翠壁の粧ひ、又行き〳〵て芝山の遠く出たる崎に、松の綠木深く見ゆるに、少し隔てゝ、大島の色どりて見えたる、都て海は右に見つゝ下りぬ。

日もやゝ傾く比稻取村に宿る。今宵のあるじは此所の村長、村木長四郎と云へり。此家に鎭西八郎爲朝の旗を持傳へたりと聞きて、所望して見つ。

絹竪三尺三寸横一尺（曲尺）

歸命崇德天皇尊神　爲義
此所畫はみ　爲朝

いと古めかしく、歸命の二字のみほのかにして、其外は能く讀めり、掛物にしたてたり。さきの年執政定信朝臣、殊に賞せられて、別に影寫して贈られたりとて一幅あり。總て本のまゝにして聊も違はず。裏に一紙ありて曰ふ。

寛政五年三月　白川侍從定信卿

台命をうけ給ひて、伊豆國の地理を見給ふ。僕此國の山河徑路、每々に知れり。故に先頭に進められて稻取村に到る。なぬし村木某が家に、

院宣の御旗と云傳へて、古き絹に神牌書たるを世々藏したり。卿此書を見給ひて、是なん鎭西八郎の眞跡ならん

と、僕に眞寫さしめ給ひたり。村木が家は八郎主の子孫なる事、數世云傳ふ。誠に希代の書なれば、眞を深く藏せよとて、こたび亦影書して贈るとしか云ふ。

寛政十歳次戊午春睦月　　村上氏秦檍丸いふ

別に羽柴孫四郎殿。政宗とかける古き文一つ藏せり。豐太閤の小田原合戰の折の物と見ゆ。猶家譜其外にも書記したる物も有りや。故由も物語りねといへど、之を爲朝の旗と言傳ふるのみにして、何も知らずと云ふこそ本意無き業なれ。予も又深く秘置くべき事を言聞かせて、扨一首を書付て送りぬ。

稲取村の村木某の家にて、爲朝の簾なりと言傳ふる物を見て
筆の痕をみるぞかしこき此宿の世々の榮えの程も知られて

廿七日。(曉小雨。未明晴陰不同、微寒、巳刻晴)

宿を出て濱邊を行くに、漁家軒を連ねたり。天王坂より山にかゝれば、空曇りたればにや、沖の島々近く見ゆる。あはいの澤と云ふ所に到りて、初めて安房の崎を望む。

大網坂と云ふは、頼朝卿の乘り給ひし、生月と云ふ馬を、網にて捕へたりし故の名と聞けり。山の上に芝生の原あり。左りの山の奥二里ばかりに、青鈴が池と云ふありて、此馬に水かひし處と云傳ふ。今は此池の邊、梅櫻ありて、春は人も訪來て賑はふとなん。此峠よりして白田村なり。

白田坂を下りて濱を行く。此處の磯は大きなる丸き石多し。

此所に年古りたる家有りと聞きければ、濱より左へ一丁餘り入て農家に至る。主を倉橋權兵衞と云ふ。家の造り柱太く板厚くして今樣ならず。中にも厨の柱の目立ちたれば、片面に扇をもてあつるに、猶三四寸も足らず。幾年に成るぞと聞けば、八百年も過ぎぬと云へり。かぐつちの神の祟をよくるとて、諸人の板を乞求むとて、二尺ばかりの板を

予にも與へぬ。

松ならでたれか昔を白田むら八百とせ餘り古りし家居は

持傳へたる物とて見せける。二通の書を寫しぬ。

伊奈熊藏樣より鄉中百姓えの御狀一
通天正十七年丑年に來

白田之鄉當成ケ之事如二前々一被二仰付一候間田地少も荒れぬ樣ニ開發可レ被レ仕候。田地不レ荒樣ニ於ニ開發一者先々成ケ之内をも少御宥免可レ有レ之候間飛隣候　百姓等何もめしかへし指南可レ被レ仕候。種公用於レ無レ之者入次第借可レ申候。何事も傳役之儀從ニ家康一被ニ仰付一候分は我等手形次第御奉公可レ被レ申候　上樣より之御用等者不レ及ニ手形一。不レ限ニ夜中一御奉公可レ被レ申者也仍如件

刁五月五日　　伊奈熊藏㊞

豆州　加茂郡
白田村　百姓
倉橋權兵衞藏

白田之郷百姓中

又一通　　伊豆國しら田

條々

一　地下人百姓等急度可レ令二還住一事

一　軍勢甲乙人還住ゝ百姓不レ可二叮取一事

一　對二土民百姓一非分の儀申懸之族有レ之者可レ爲二一錢切一再麥毛不可二刈取一事

右條々若於二違犯之輩一者速可レ被レ加二御成敗一者也

天正十八年卯月日（朱）　文字不明

此家の左りは、軒端に山重りて、仰ぎ見るに中にも殊に高き山の尾上にのみ雪の積りて、其外は芝生の山なり。何時降りたる雪ぞと問ひければ、よべより降りて只今歇みぬと云へるぞ。辰の刻ばかりなりける。いつもなべての山に積らでも此尾上のみに斯く積りける事ども有りと云ふにぞ、高さは知らるゝ。此上は天城山の内にして、番次郎山と云ふとぞ。

立出し稻とりむらの寒けさも思ひ白田の峯の白雪

天城山ふりつむ雪の白田村春忘れたる風の寒けさ

爰を出て濱に出れば、川奈村の崎、富戸村の上人崎丑の方に見ゆ。此邊り大島利島新島見えていと近し。大島は十里を隔つとも、又は九里とも云へるとなん。

暫し行きて村堺の石川あり。白田川とも片瀨川とも云ふ。橋より十七八丁にして海に入る。三瀨に流れて、板橋三つ架たり。所々矼もありけり。

春ながらはしろの山に雪ふれば片瀨河原の風さゆる也

同し事ながら、いとも〳〵寒きまゝに、幾度もいふなり。

渡り過ぎては片瀨村なり。此村は鰐鳥賊を餌にして、まぐろと云ふ魚を釣るに、糸を百尋も下げて、一棒釣をすると云ふ。其他には濱の砂利を舟に積みて出すを生業とすると聞けり。

坂を上りて山を行くに、海面のながめよろし。

奈良本村。山越下る坂あり。

同し處の枝郷に、ほつかはと云ふあり。爰も山越なり。

大川村、濱を行く。此村は檜を多く出せり。此處より大島へ七里といふ。

川を渡りて向坂、七曲坂といふ嶮しき坂を登りて山路なり。此山中に美蘭樹といふ木あり。幹は赤松に似て軟らかく、枝葉百日紅に似て、皮の色は淡紅にしてにび色を帶びたり。來ん月には開きぬべく花の蕾多くあり。

山の半より赤澤村なり。赤澤山の三本椎とて、一株にして枝の三つに分れたる大なる椎の木、道より左りの山に在り。麓に河津三郎の墓とて、石垣にて疊みたる小高き上に、五輪の石塔あり。爰の右の杉の林の平なる處を、相撲場と云傳ふと云へり。河津と股野のすまひの事、世に云ふ事なれば玆に記さず。

八幡野村の山になりて、左に馬蹄石あり。こは先に云へりし、青鈴が池にて捕へられたりし、生月と云ふ馬の足跡の石となり。故に此處を馬の足跡の山と唱ふと、土人云へり。

此處を過ぎて、石投山と云ふを左に見る。股野五郎の投げしと云ふ石。大さ四尺ばかりにて、麓の畑の畦にあり。眞田與市の投返したりと云ふ石。大さ三尺ばかりなるが、峯を少し下りてあり。此邊りきりみずと云ふどくえの油になる木許多あり。又黑木と云ふもあり。村の有る處は性惡くして、此邊宜しとなり。

大川村より此の方、海を見る事稀なりしが、山を下りて橋を渡れば里ありて、又山に上るに、右に海面見渡され、島は大島のみ見ゆ。左は畑を珍らしく見て。向ひは山連なれり。

二十丁ばかり行きては、蕩々たる平らなる芝生あり。左の方に淺間大明神の在すといふ芝山あり。其次におむろ山とて、八幡宮の鎭座ます山あり。

道のほとりに大きなる松あり。土人に問ふに、八幡見晴しの松とも云ひ、又は賴朝卿御小休の松とも稱へ侍ると云ふ。幅は四方二十間ありと申し傳ふと云ふ。高さは五丈の餘も有るべし。本は五人にて抱ゆともなほ及ぶまじと思はる。八幡の山を越して、遙かなる峰に雪を見る。此峰も天城の山續きならんと云へり。

八幡野村の村長八十五郎の家に休みて、出れば杜の下道平地なり。杜を出離れて廣き原なり。此所をさき原三里と云習はして、和田村まで三里の原なりと云ふ。左りは芝山遠く、今朝白田村にて近く見し番次郎山の雪も、まだ消やらず遙に見ゆ。右は海の面唐までもと見やられて、大島は七里ばかりと云へれば隈々も現はなり。三宅島は利島より左りに連なりて、霞の中に浮べり。安房の國も黑く、辰巳の方に見ゆ。夕日の映ろふ樣、えも言はず詠められぬ。此邊りより富戸村といふ。家は見ず。

此原十七八町も過來ぬれば、上總の鋸山も見えて、續きの崎は安房の布良崎を限りたり。三浦郡も爰よりは見ゆ。何れも大島を望むよりも遠し。

吉田村、小坂を下りて芝生なり。左の方山遠く、右は川奈村なれば、山を隔てゝ海を見ず。此邊山の裾野を行く。暫しありて切通しを下れば里あり。家數少し。又杜の木陰を過ぎて、右に廣き芝の原ありて、老松の四本五本立たるが、綠深く其末に海見えたり。爰にては安房は見ゆれど大島は見えず。又坂を下る。

和田村。伊東の内なり。總名を伊東と呼びて、和田村、新井村、湯川村、松原村、鎌田村、竹内村、岡村と七つに分

てり。

左右廣き芝生にて、さりぬべき園の内にも有りぬべき芝山を、左に見つゝ行くに、其上に遠く番次郎山の雪、又も見ゆ。

杉木立の小暗く茂りたるに、日も暮ぬればいと物淋しく覺ゆるを、つい松燈し連れて、迎へにとて出くるに、心も爽になりぬ。左に鎌田村白坂と云ふ、山のもとに伊東祐親の屋敷趾ありて、同し人の墓も、麥畑の中に在りと語りき。

坂二つ三つも下るに、道泥りていと煩はし。果の坂別て長く、下るに又道も惡し。松明なかりせば如何にか爲ん。下り果れば今宵の宿りなり。

いく山か越えてぞ春の日永さも知られて宿る和田の村里

廿八日（晴。）

曙に此和田村の宿りを出て、二丁ばかり行きて、田の端に溫泉の庵二軒ありて、一つには湯壺一つありて熱く、一つには三つありて少し溫し。是れ世に伊東の湯と云ふなり。此溫泉場より南に當りて、日暮しの杜、音無の森と云ふあり。又此森に音無明神あり。竹内村の鎭守と云へり。杜の後の小川を、ならずの瀨と云ふと、土人の云へるを遠望せり。是は昔賴朝卿の此國に流され給ふ時、伊東祐親の娘にみそかごとし給ひて通ひ給ひし跡とて、此ぞ名づくると云へり。委しくは曾我物語にあり。

松原村の松原橋（板ばし十五間ばかりなり）を渡るに、まだ人も通はぬ樣にて、いと霜深く冬をおほめかせり。人跡板橋霜と云へる事抔思ひ出づ。

湯川村の濱を行くこと。十丁ばかりにして、右に手石と云へる島、初島と云へる島の森の木立も見ゆ。爰よりも安房

の崎は見えず。大島は見えたり。大磯の崎は霞に聳ゆ。此所海は正東なり。海に添ふて山に登るに、松の梢を越て、渺々と見ゆる果より、白波を分けて朝旭のさし昇るが、匂ひめでたく、初島に映ろひて、霞も薄く沖行く船の帆影も、ほの〳〵見ゆる抔、暫し止まりても哉とぞ思ふ。

宇佐美村、砂利濱を行き、村里に到りて、左の方に春日の社あるを、行きて拜みつ。此社頭に安宅丸と云ふ御船を造らしめ給ふころ、伐りたりける楠の木なん有りける。伐りたりし本の幹は、十二人して抱ゆと云へり。空洞になりたる皮よりして、藥なん四本五本生ひて、此さへ木の本二三人して抱えつべく見えて、枝葉繁茂せり。實にも珍らかなる物とぞ見ゆる。

行く手の左に、鎭守八幡宮と額打たる、石の華表あり。村長半三郎の家に休らひて、往來の道の松の葉越に、海の面を詠むれば、左は眞鶴崎、右は川奈崎を限れり。磯打つ波の景色殊更によし。庭に大なる蘇鐵の許多枝ふりたるあり。所望したれども、持傳へたる木とて否みつ。又山越なり。此處海を見ず。峠を網代峠といふ。此よりして網代村の境なり。峠よりは海望宜し。乾の方疊嶺の上に、富士の嶺二合目より上見ゆ。右には天城山昨日の雪、未た消えず見ゆる。

左り不二右に天ぎの雪をみて寒きあしろの春の山越

此山登りも下りも一里にして、右に濱邊を行く。村里家居多く、軒端續けり。爰に休らひて晝の餉たうべ、船よそひするを待つ。此湊より熱海まで、渡海二里なり。岡道は下多賀上多賀を經て、同し二里なれども、山路嶮しと聞く。汀に出れば幕打廻し、兩宮丸と書たる幟建てたる船繫ぎたり。此船にのるに、小舟二つして引出ぬ。やゝありて舳に乘りたる長めきたる者が、扇を披きて指上れば、艫に群居たる水主ども、船歌謠ひて波に響く聲、いと勇まし。斯る事どもも、君の御惠と覺えて、畏くぞ思ひ侍る。今日は殊更風もなぎて靜なり。

こぎ渡る網代の海のいつて船いつしか旅に日をぞへにける

斯く云ひつゝ沖に出る程、なごろ高くして、舟醉する從者もありけり。いともなぎたる日なれども、爰は大洋に續けるが故、常に斯くなころは高く立ちぬとぞ。暫し行きて此網代と熱海の堺なる磯山近くなれば、其渚に巖許多有るが中に、大穴觀音と名づけたるあり。又無能山と云ふは、長く穴の穿てるなり。こは女のほとに似たれば、斯く云ふと教ふれば、上下なべてさと笑ふ。先に打伏したる者も、これに少し心地直りぬ。誰も〳〵顧しつゝ過る也。岩ほなればの名と思はれて、いと名付がらおかしくぞ思はるゝ、

するめにはならぬ岩ほの無能山いかにも〳〵かたきなるべし

鯛の餌くゞりと云ふ岩は、いち先に立て、此より熱海の海なり。烏帽子岩、冑岩、碁盤岩抔と次々にあり。此出崎を回りて、暫し行けば熱海より、迎ひの小舟出來れり。此處の濱は荒濱にて、押送り形と云ふ船は大きくして寄らねば、此小船に乘移りて岸に寄するなり。されども例の岸は風出たれば、疾く行きたる舟の波打入るゝばかりに見えければ、予が乘たる船は一丁ばかり沖の方の、山の麓に着く。やがて熱海村なり。暫し行きて未の時ばかりに宿りに到る。此家の前に、溫泉の出る處あり。垣結廻し內は石疊なり。程もなく沸上りつる烟は空に滿ち、山も家居も草も木も立隔て、音は鳴神をいと近く聞くに似て、其邊りは小雨の如く降るなり。半時ばかりにして歇みぬるが、又黃昏にも斯くありつ。いつも日に三度。夜に三度かく湧出ぬといへり。此溫泉を麓になして、來宮明神の山あり。此所は伊豆の高根の西の麓にて、地主白道明神を祭る。昔故ありて、伊豆權現高麗の國に到り給ひけるを、此神再び誘ひ歸り來給ひしに因て、世の人斯く唱ふと也。此山に大なる楠あり。周り十一抱半あり。幹はうつろに成て洞の如く、三十六人居並ぶと云ふ。此外にも七八抱の楠ありと聞けり。此宿の一碧樓に登れば、海の面遙に見渡して、初島いと目近く見ゆ。酒呑み物食ひ抔して興をやりぬ。少し風の心地はしつれど、又と來べきならねば、夜になりてゆあみはし

つ。從者どもゝ風の心ちとて、ゆあみせざりし者は、名殘多かりき。

廿九日（晴）。

とく起出て、よべの名殘多かれば、又一碧樓に登るに、曙の樣殊にして、波に離るゝ横雲の空長閑に、朝日の漸昇りて、海面遠く霞に匂ふ浦の初島かけて、光り映ろふは、花の雪散る交野ならでも、又や見んとぞ思はるゝ。

見るが内に遠ざかりゆく和田の原霞も薄き波の曙

かすみつゝ朝日のどかにいづの海や波とともにぞ影は寄りくる

など吟して、名殘あるものから、此宿を立出て、村を離るれば、伊豆の御山を登る。二十丁ばかりにして、左りに石の鳥居あり。其傍に立てる棚にはしめはへたり。別に三四本あり。石階三丁登りて權現に詣す。此御神は正哉吾勝々速日天忍穗耳尊を祭れり。幣奉りぬかづき畢れば、僧二人居て、神酒とうで御幣授く。やがて加持の棚の葉を守札に採添へ、緣起記したる册子とを與ふ。内陣の額は、

勅筆にて、伊豆大權現とあり。拜殿には正一位勳二等關東總鎭守と云ふ額を掛たり。爵位は白雉五年に賜はりしとぞ。又拜殿の外は深川親和の篆字、石の鳥居は或諸侯の筆とて、孰れも伊豆大權現と云ふ額打たり。天正十八年豐臣太閤小田原の合戰の時、兵火の爲に堂社燒失せたりしを、文祿慶長の比より、後々も仰言ありて、修理せしめたりし事とて、社頭物古り堂宇の莊嚴、言ふばかりも無く尊くぞ見ゆる。社の後なる棚は、いと大樹なり。此邊此木多し。

仰ぐぞよいづの御山の玉つばきたま〳〵來ても滋き惠を

よのさがはなぎの若ばを吹く風のはらふも涼しいづの神垣

此山の奥は則ち、日金山なり。社頭の内、鐘樓護摩堂諸の小堂小社あり。櫻童子の社、今は大鳥居村に移したりと聞きしが、名殘覺えて、今日も一木の花の盛りに咲たり。

やよさくら昔のあとのしるべして今日を盛に咲やいづらん

石階を半下りて、左に若宮雷電大權現の社と云ふあり。こは本社の神の御子、天津彦火瓊々杵尊を祭るなり。延喜六年二月雷電鳴りはためきて、天降りましたる故に、斯く崇め奉ると社僧云へり。此社の邊りを並べてこゝ井の杜と聞きて詠める。

またしともこゝゐの森の心みに鳴て聞かせよ初郭公

石の鳥居より正面は、足の元よりしだい下りの麓にて、海岸まで八丁ばかりあり。其邊に走り湯はありといへり。海は木の間より見ゆるに、一筋開きたる道ある所より、聊か廣く見えたり。初島も見ゆ。少し山を下り行きて、道の左りに黑き門あり。別當般若院の家なり。眞言宗三寶院の配下にて、社領三百石を管れりと云へり。大休峠まで海岸の山道なり。坂を下りて大なる石の濱なり。此所を門川と云ふ。門川橋を渡る。此川伊豆と相模との境なり。濱邊にある里を門川村といふ。又小川の橋を渡る。濱續き吉濱村の人家あり。濱の摸樣都て同し。柏坂に登らんとする右に、小道の地藏あり。この坂四五丁道さかし。登れば三軒茶屋とて民家あり。此邊なべて土肥の杉山なり。土肥次郎實平の跡は何所にやと問ふに、此所の堀の内村城願寺に、木像も墓もあり。實平の像一尺二寸、直衣折烏帽子にて太刀を佩り。彌太郎遠平の像も一尺二寸、法躰にして黑衣を着したり。古宅の跡は此寺より五六丁上の山にあり。又一里ばかりに澤田の城と云ひし跡ありと語りき。

山越するに、右の方眞鶴村有りと聞く。

長福寺白衣觀音、厄除觀音と云ふ。石の道標畑中に立てり。川堀村の坂の下に休む。

いは村、長坂と云ふ高く嶮しき坂あり。峠に至りて初めて大磯、小磯、小田原の城の櫓。町屋抔見ゆ。

江の浦村、坂を下る事八九町にて、根府川村なり。又二三丁下りて關あり。箱根の守りの如くにして、別に唐銅の大

筒五挺を置けり。

ゆく春のそれだにとめよねぶ川の關のせきもり守安きよは

埒を出て小川の流あり。橋の向ふなる廣井某と云ふ家にて晝の餉す。庭は此地に産する平石所狹きまで布きて蘇鐵多く植ゑたり。池の汀の羊躑躅盛りなり。

又海岸の山越、米神村を過ぐ。土橋を渡りて石橋山なり。頼朝卿治承四年の軍に、戰死して功ありし眞田與一の墓、道より左の松木立の下にあり。右の森の中に、與一の郎黨なりける文三の墓と云ふものあり。矢の根石、手形石などあり。

山を下りて早川村と云ふに出れば、元來し箱根山の山口を遠く見渡し、右に顧すれば眞鶴崎、其向ひに伊豆の初島を望む。下田を出しより山越のみにて有りしが、此所より平地の眞砂地也。濱傳ひ行くに橋二つ渡る。早川の流れ海の眺望、孰も〳〵言はん方なし。濱邊に村の人家あり。猶濱傳ひ小田原の千度小路といふに到りて、高札を一見しつ。所の領主より殊に預かれる長立たる、千賀衞守といふ者を出し置かれぬ。

左りに一丁ばかり行て驛に出づ。暫し休らひて元來し道を行くに、東海道に出れば景色殊に往來の人も賑はひて、松風の音長閑に、霞たなびく夕暮の色深し。

酒匂川を渡る。臺輿肩車前の如し。

梅澤村に休む。此間此處彼處八重櫻の。盛りやゝ過るばかりに咲たりければ、

過がてに見るはあやなし八重櫻春をとめゞて咲る色香も

黄昏過る比、大磯の宿りに着く。

あけはてば春も夏にやこゆるぎのいそべの波の枕ゆふなり

四月朔日（陰、未後快霽、微暖）

今日は衣更なる事を思ひ出て、

大いそや小いその濱による波も夏來にけらし白かさねせり

花水橋、左に雨降山を見て朝の景色よし。

平塚驛を過ぎて馬入川船にて渡る。川の央より酉の方に富士、亥の方に雨降山見ゆる。

今宿と云ふ邊り、八重櫻の餘花盛りなり。

藤澤橋の下に銅の鳥居立てり。橋を渡らで右に折れて、川を左にして行く。

右に紐解觀音ありて野道なり。

片瀨川を渡る。船橋なり。（艀船二つ竪に浮めたり）

つかへする身にしあらずば又見んもかたせの河の水のしら波

片瀨村、左右廣き畑なり。爰を過ぎて袂が浦に出れば、眞砂地清らにして、今日は汐干なれば、徒歩にて江島に到る。汐干よりして左は鎌倉三浦を見渡し。大島も見ゆ。右は大磯小磯の邊を望む。不二は雲の裡より出て空に聳へ、遠山翠壁の如く波に連なり、一きは高きは雨降山と箱根山となり。箱根は島の彼方に見えたり。烟霞滄海の景趣たぐふ方なく詠められぬ。島は老ず死ずの藥なん求めもしつべく、堯惠か蓬萊洞といひしも宜なりと思はる。島に到れば先銅の鳥居に、金龜山と云ふ額打たり。茶屋町を登りて下の坊に到る。眞言宗なり。酒肴出してもてなしつれば、暫し爰に止まる。

又坂を登りて下の宮に詣づ、金龜山の額あり。

土御門帝の御時、良眞和尚入宋して持來りしと云ふ石の碑も、土中に半埋れて建てり。篆額は大日本國江島靈迹建寺

之記と見えたれど、其外の文字は詳ならず。上の宮に到れば、天女祠と云ふ額を打つ。岩本院の預れる本宮の額は、大辨財天と書きたり。内陣には、

後宇多帝の宸筆にて、江島大明神と書かせ給ふける額を掲ぐ。神輿は四月巳日に此宮に移し、十月巳日に渚の窟に鎮坐ませしむとなん。此十二日には其式を爲すと僧の云へり。内陣に入りてぬかづけば、社僧神酒與へ御幣授けぬ。從者にも神酒與ふ。先の上下の宮も此の如し。

みそなはす大うなはらのいとひろき惠をあふぐ江のしまの神

内陣の外に掛けたる對聯に曰く、

人皇八十四代順德院御宇。建保四丙子年正月十五日

己巳日。大海忽變成二道路一誠幾希有之神變也。己巳祭始焉。

又山門にかけたるは、

自二開化帝六載己丑四月涌出一。至二安永己亥一。千九百三十一年。

南の渚に下りて濱傳ひ波を踏んで洞窟に入る。奥に宮あり。無熱池、弘法の護摩壇。日蓮の趺坐石などあり。窟の前にある平なる石を魚板石と云ふ。立返りて濱邊にて眺望して、暫しあるに、漁父の岩上に釣を垂れたるも面白し。坂を登りて兒が淵を下り見る。こは昔建長寺の廣德庵にありける自休藏主が思ひをかけし。白菊といふ童が、二首の歌を詠じて身を沈めしに、自休慕ひ來て又詩一律を賦したる所と云ふ。此處に此島の言ずんじたる詩歌鐫りたる石の碑どもあり。

歸途は元來し汗干しほ滿ちて、疾く行きたるずさは海を隔てゝ群居たり。此所も又臺輿肩車にて渉りぬ。腰越村を過ぎ、こゆるぎの松ある小山を經て、七里が濱なり。げに遥なる砂濱にして、打寄する白波は足を洗ふばかりにして、

百たび千度よせかへるさま畫にかけるが如し。海の指渡し三崎まで六里といへど、少し遠き方に見ゆ。左は小山續けり。稻村が崎まで四十二丁ありといふ。靈山が崎稻村が崎を向ひに見つゝ、左の岡道に登る。此邊りを袖が浦と云ふと土人いへり。元弘の昔左中將義貞朝臣、此所にて佩刀を海に沈めて祈り給ひけるが、干潟となりて易く北條高時を亡し給ふける事など專ら物語りしつ。

極樂寺の切通しを過る程は山間なり。右に成就院あり。左に靈山、極樂寺の前を行く。門の外に下馬の札建てり。門より堂まで並木の櫻盛りなり。遥かに霞むばかりになんありける。

白雲のおり居るとのみ見ゆるかな匂ひみちたる花の幾本

坂を下りて星月夜の井あり。坂下村に出れば民の家居立並べり。村をはづれて左に行けば畑あり。左の山の麓に丹塗の社あり。御靈社權五郎景政を祭るといふ。

長谷村、左に長谷寺を見て、右に折れて小橋を渡る。此小川なん、萬葉集に、まかなしみさねにわはゆくと詠めりし。水無能瀨川なり。土人はいなせ川といふなり。

甘繩神明の宮を左に拜む。吾妻鑑に奉幣の事見えたり。

右の方離れたる民家の傍に、蔓生いたる五重の石塔あり。由井の長者の墓といへり。

麥の畑打開きたる所を行くに、右に海鹽見ゆ。又 ⟨瓶⟩ かうやうなる墓畑の畦にあり。是は鎌足公の玄孫染屋太郎太夫時忠のと云ふ。時忠の養老神龜の比、此地に住みける人となん。

日もやゝ傾く頃、鶴が岡の八幡の二の鳥居の本に到り、雪の下を見るに、段蔓（段蔓とは一の鳥居より二の鳥居の間に、馬場の如き所あるを言ふ）のあふさきるさ軒端續きて賑はし。一の鳥居の下なる家に宿る。

二日（晴。夏色漸催）

つとめて八幡宮に詣づ。鶴が岡の松風、千歳の聲を鳴して、柳原の柳、年經りても變らぬ綠の色、いとも〳〵信心肝に銘じ、尊くこそ覺え侍れ。山上の宮は去る壬午の年睦月に回祿しければ、石階のものと若宮に鎭坐なり。本宮三社若宮四社を祭る。あすは祭なればとて盛砂など布きてあり。

陰高き神の惠も鶴が岡とし經る松の色に見えけり

ほと〻ぎす誰が爲ならぬ夏も來ぬなきてきかせよ鎌倉の里

公曉の隱れたりしと云ふ銀杏樹、又は轉輪藏、多寶塔、鐘樓など見巡りぬ。垣の東なる鳥合が原、頼朝卿の屋敷趾、或は同し卿の墓、法華堂、荏柄の天神、衣張山などは、前の年見ければ爰にて遠望して、元の赤橋を渡り、雪の下二の鳥居の左りより村に出て、日蓮の法を說初めしと云ふ比企が谷の妙本寺を左に見、松葉が谷安國寺の前を過ぎて、名越の切通しに懸る。此山の峠より、富士をば西北に望む。小坪村の廣尾坂を下る。此小坪村よりして三浦郡なり。村里を離れて砂原を一里ばかり行く。右の入江を隔て〻見ゆる飯島の崎、郡の界なり。多古江川北より南へ流れて海に入る。景色尤もよし。橋を渡る左りの方、川上遠く六代御前の墓ありと聞きけれども見ず。橋より右に濱傳ひ行く。櫻山村。堀内村の濱續く。此所鐙摺、心無、佐賀岡の三つの濱を合せて、三が浦といへり。頼朝卿の渡らせ給ふける大多和義久が家の有りしと云ふ、鐙摺山も仰ぎ見つ〻行く。岡道に入りて畑の中に在る高札を見て、僅にして又濱に出づ。都て此濱邊は、入江の波靜にて、大海のおもても長閑に、駿河の不二江の島も見渡されて、眺望奇絕の處なり。

いつしかと春はすぎけん櫻山うらわの波に花を殘して

こゝに又雪打よせて浦波の行くへに浮ぶふじの芝やま

江を隔て〻森戸明神の森を見る。此社は治承四年三島の明神を、頼朝卿祭り給ひけりとなん。飛柏、槇、千貫松、腰掛松などありと聞けども、遠ければ分らず。森の出崎の磯の最端に、名島と云ふ岩島あり、此島の中に井ありて、雨を

祈るに驗ありと云へり。此景又趣珍らかなり。

岡道に入りて此村の中、葉山と云ふ所に休む。苗代を見て、

いくしたて水口まつる小山田に綠も深き賤が苗代

蛙を聞きて、

夏きぬる葉山の小田になくかはづかひやが下に聲ぞ淋しき

一色村、岡道を行く。

下山口村、岡道を行くに、小川の流れに添ふ板橋を渡り、小坂を經れば里ありて濱に出る。

秋谷村大崩とて、山の崩れて海に入りたる跡あり。そが故に一騎さへ、行惱むばかりに道狹し。永正の頃三浦導寸。此所にて敵を支へ止めたりしとぞ聞く。立石と云ふ高さ十丈ばかりなる大なる巖の、渚を少し離れて立てるあり。此濱よりも江島富士見えて、遙嶺の蒼海に浮めるさまと、此の所の崩れと云ふめる邊りの景色、前の三が浦に比ぶれば遙に勝れり。

蘆名村、岡道を行くに、畑を三四丁隔て〻、右の方長井の入江に、漁船のあまた泛べるが見えたり。

大多和村、村界に小川あり。五丁ばかりにて海に入る。

林村、左りは三浦の內に最高き武山を望み、右は田畑打越して入江あるが、濱邊の渚に松立並びたるが、何れも蔭高く、千歳の緣風を含みたる木の間よりして、入江を詠め、左の崎は長井村なり。右は佐島村なり。天神島と云ふもあり。遠くは心ゆく限りに見やらるゝ海面なり。

立ならぶ松の林の浦かぜに梢をかけて洗ふしらなみ

和田村、岡道なり。此村長の家に暫し休む。

此村に和田義盛の古城の跡、今に大手の橋堀の跡も有りと聞きけれど見ず。

菊名村の曳橋と云ふ所に至る。三崎の往還道なり。今は橋なし。左右深き谷にて、昔の堀の跡なりと云ふ。左に安房上總の海を木の間に詠め、右は相模洋を望む。道より右の方は網代村なり。出崎に森の木立あるが、三浦導寸の網代新井の古城の跡なり。油壺の湊も其下に見ゆ。風景よき眺望なり。

原村、左に六萬本山と云ふあり。こは松の木の數多くある故に名づくとなん。此處を過ぎて、左右廣く打開きたる畑なり。不二を望む。

東岡村を過ぎて三崎町に至る。町屋軒端續きて賑し。漁家多き所なり。

陣屋山の麓に予が組を差置ける役所あり。彼處にまかりて組どもをねぎらひ捉たれば、御船屋、焔硝の洞、櫻の井、扇の井など一見しつ。一つの窟に向井氏の古碑あり。此の陣屋山は北條早雲の持城にして、北條美濃守氏規居城せし跡なり。去る庚辰の年まで、松平肥後守容衆の陣屋も此所にありしとて、此處彼處礎のみ殘れり。

門を出て市町を見巡りて、海南明神に詣す。高き山に鎭坐なり。祭は十一月申の日と聞けり。今宵は此所の光念寺と云ふ寺に宿す。山上なれば、目路近きより遠の海原見渡し、湊に泊る大船、渚に繫ぐ釣舟の許多なるも眼下にありて、城が島は東の崎より半まで見えたり。老松の立並ぶが、此島は風荒ければ、彼方此方に枝繫く靡き、波に千歳の影をうつし、又島根の岩に寄する波は花と散かふに、鷗の群居る岩も、遊びが崎の洲崎の、洲濱作りたらんやうに見えたるさまも、夕暮は殊更に見所多し。

夜になりて、在勤し居ける組の與力同心、城が島の籌守なる御代官の手代、所の村長ども、問屋酒屋船持、或は城が島其外近き所の村長どもは、皆予が預れる所の者なれば會ひける。光念寺、本瑞寺、城が島の常光寺も出ぬ。

漁し侍る魚なりとて、此村長どもより出しつれば、調じて上中下給べ酒呑などしつ。村長どもにそれ〳〵祿與ふ。

初更の比、此寺の門邊に立出て、城が島の籌火を見けるに、炎立昇るさま、千里の外を照しぬれば、龍の都にも如何に愛づらんと覺ゆるばかりなり。漁火を千艘合せたらんも、中々及び難かるべし。

三日（晴）

湊の見渡し朝朗は又勝りたる景趣なり。元御番所跡の渚より船に乘りて城が島に渡る。六七丁也。坂を登り、此島の西の出崎の岡なる籌屋を一見しつ。こは沖行く船の爲にとて、おほやけよりして夜な〳〵、籌火燒かせらるゝ所にん有ける。此籌は此處と志摩の國菅島と二所にあり。此所よりは三蒲郡の西浦なり。小田原、大磯、眞鶴の崎、伊豆の浦々かけて、稻村の崎まで相模洋三十里餘の海を見渡し、駿河の不二甲斐が根も遙に見ゆる。安房は見ゆれども上總は見えず。

東の出崎の岡を安房崎と云ふ。爰よりも伊豆の浦々、大島かけて安房上總見ゆる。不二江の島は見えず。この處に遠方を望む番屋あり。予が預りの同心三人在勤して居れり。都て此島より東南の海面の眺望、障る隈なく見渡され、行方何處としら波の雲を浸して、西より東より往來する舟どもの、無きが浮み有るが隱るゝめぢ限りなき眺め、たぐへん方なかりき。此岡の麓の磯に、洲の御前の宮と云ふ小社あり。其傍らに賴朝卿の箸を挿させ給ふが生育たりける栢杉ありしが、其木は此十年ばかりさきに枯れたりとて、跡に一本若木の栢槇あり。又北の磯に水垂とて清水の井あり。蓑老、蛇島など云ふもあり。此外めぐりの磯に岩島多くありき。

村の家居は皆漁家にして僅なり。村の東ぼねりと云ふ所より、船に乘りて出るに、左に楫の三郎の社と云ふは、小島にあり。磯邊離れて海士のかつぎするも遙々と見ゆ。右は遊が崎にして、島より一丁ばかりも出たる崎なり。松など程よく並びて草木の茂りたるが、先は眞砂にして岩など立たるが、都て態としなしたるやうなり。向ひは毘沙門村の堂が島、宮川村のてうな崎、三崎、二町屋、諸磯などの村の家居續きて見ゆる。景色尤もよろし。此所も六七丁にし

て、元御番所跡の渚に船つきぬれば、上りて市町を行き、陣屋山の麓より、元來し東岡村、原村、菊名村を過ぎて、上宮田村の十刧寺と云ふ寺にて、晝の餉す。門の左右に松の並樹ありて。正面に海を見晴せり。

津久井より濱に下り立ちて、長澤、野比、浦傳ひなり。二里餘りの眞砂の濱にして、とはに波打寄する所なり。岡邊は松立並び、所々に魚を見る假庵あり。地引の綱の長き日も、午の下りなれば急ぎ行くに、迎へにとて浦賀より同心二人、野比の濱に出居たり。千駄の山を越えて、久里濱村に出る。住吉明神（東鑑に栗濱明神と云へるは、是なるべきか）を右に伏拜みて、西北を指して行く。野中に在る天王の松と云ふ木のもとに休らひて、八幡村、内川新田、二つの橋を渡る。此橋右は内川、廣くして砂濱の遠に海原見え、安房の峯々の立てる中にも、富山いと高く目立ちぬ。近くは浦賀の山、久里濱の千駄崎まで廣らかに詠め、左りは佐原村、久村、森崎、池田、吉井の田の面、内川の川上細く二筋に流れたるが、遙に打開きて見やられぬ。此處を過ぐれば浦賀の分郷久比里なり。里を離れて畑を左右に見て、木の宮の山を左に過ぎて、久比里坂を登り下りて山の下道行き〳〵しかば、浦賀にぞ到り着きぬる。

ふる里をしのばぬ日こそなかりけれ山よしといひ海よしといひ　源長保しるす

文政七年卯月

豆州下田巡見相州浦賀への路程

品川（本所三ツ目ヨリ此所迄三里川崎へ二里半）晝休

大森村小休　六郷川船渡　川崎小休（神奈川へ二里半）　生麥村小休

十八日七つ時着

神奈川（程ケ谷へ一里）宿

程ケ谷小休（戸塚へ二里）　戸塚小休（藤澤へ二里）　影取村小休

藤澤（大磯へ四里九町）晝休

十九日七つ半時着

四ツ谷小休　南郷村小休　馬入川船渡（御代官江川太郎左衞門手代壁源右衞門出ル）

大磯（小田原へ四里）宿

梅澤村小休　酒匂川連臺渡（大久保加賀守殿家來松田卯右衞門出ル）

廿日八つ半時着

小田原（箱根へ四里八丁）宿

湯本村小休　畑小休　新家小休　箱根關（大久保加賀守殿家來勘番）

箱根（三島へ三里廿八町）晝休

山中村小休　三ツ谷村小休

廿一日六つ時前着

三島　茨木村ヘ二里當驛ヘ網代官江川太郎左衛門手代町田時右衛門出ル　宿

茨木村小休　大仁村ヘ二里此小休成願寺ヘ前同人手代山田山蹤出此村ヨリ北條マデ大久保出雲守足輕案内

大仁村　立野村ヘ二里此村ニモ大久保出雲守家來出　畫休

狩野川　瓜生野川トモ云フ繰船渡二艘ニテ代々渡ス　立野村小休　湯ケ島ヘ三里　門野原村小休　嵯峨澤川歩行渡

廿二日七つ半時着

湯ケ島村　梨元村ヘ六里此間天城山中也　宿

萱野新田小休　大川端野立　呑湯等湯ケ島村ヨリ持出

天城山峠下　畫休　梨元村ヨリ出張ノ茶屋有リ

南大川端野立　疱瘡神社之前野立　呑湯等梨元村ヨリ持出

廿三日八つ半時着

梨元村　茅原野村ヘ二里半　宿

小鍋峠野立　茅原野村野立　中之瀬村ヘ二里半

中野瀬村　下田町ヘ一里　畫休

廿四日八つ時着

下田　宿

支配三ケ浦巡見　柿崎　須崎　外浦

廿五日

同所　柿崎村ヘ拾町柿崎ヨリ白濱村ヘ三拾町　宿

白濱村明神社之傍濱ニ野立　縄地村ヘ一里

縄地村小休　川津ヘ一里　川津川船橋

川津濱村　見高村ヘ一里見高村ヨリ稲取村ヘ一里　畫休

廿六日八つ半時着

稲取村　白田村ヘ一里　宿

白田村小休　片瀬村ヘ一里片瀬ヨリ奈良本村ヘ拾町奈良本ヨリ堀川村ヘ十八町堀川ヨリ大川村ヘ十八町

大川村小休　赤澤村ヘ一里赤澤ヨリ八幡野村ヘ一里

八幡野村　吉田村ヘ二里　畫休

先原三里之中野立　吉田村入口高札場前野立　伊東村ヘ一里

廿七日六つ時着

伊東村　湯川村ヘ一里湯川ヨリ宇佐美村ヘ拾町　宿

宇佐美村小休　網代ヘ　平岩峠上之臺貳本松之下野立

網代村　此所ニ出張住居松平陸奥守家來飯田鄭六郎出ル　畫休

海渡　壹里餘

廿八日八つ時着

熱海村　伊豆山ヘ拾八町伊豆山ヨリ土肥村ヘ二里土肥ヨリ江之浦村ヘ一里江之浦ヨリ根府川ヘ一里　宿

門川村小休　此所ニ大久保加賀守殿足輕案内ニ出ル

根府川關　小田原ヘ二里大久保加賀守殿家來勘番

根府川村 米神村へ一里米神ヨリ早川村へ一里早川村ヨリ小田原へ二里 畫休

小田原千度小路高札見分 大久保加賀守殿家來郡奉行其外小役人出ル

小田原驛小休 大磯へ四里 酒匂川連臺渡 大久保加賀守殿川役人出

梅澤村小休

廿九日六つ時着

大磯 藤澤へ四里九町 宿

馬入川船渡 御代官江川太郎左衛門手代眞壁源右衛門出

南郷村小休 四ツ谷村小休 藤澤小休 江島へ一里

石龜川船橋 片瀨村小休

江島 雪之下へ二里 畫休

七里ケ濱 稻村ケ崎野立 坂之下村小休

四月朔日七つ半時着

雪之下村 小坪新宿村へ一里 宿

小坪新宿村野立 秋谷村へ一里名越坂峠ニ松平大和守足輕番内ニ出ル

葉山村 畫休

秋谷村小休 和田村へ二里 芦名村 大久保加賀守殿足輕番内ニ出ル

秋田村小休 三崎へ一里半此村ロニ御同人浦代官川口助右衛門手代石川順藏出ル

二日七つ時着

三崎 浦賀へ五里 宿

城ケ島へ渡海巡見 東岡村 原村引橋野立 菊名村

上宮田村 畫休

津久井村 長澤村 野比村 久里濱村 八幡村 内川新田 浦賀分郷久比里小休 浦賀田中町小休

三日八つ半時着

浦賀

行程九拾五里貳町 四拾九里二十七町本所居宅ヨリ下田マデ 四拾五里十一町下田ヨリ浦賀マデ

甲申旅日記終

昭和五年十月十日印刷
昭和五年十月十五日發行

特製
第二十九回配本
追加募集
第二十五回配本

【非賣品】

帝國文庫
（第二十二篇）
紀行文集

編纂兼發行者　東京市日本橋區本石町三丁目十六番地　株式會社博文館
右代表者　專務締役社長　大橋進一
印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　君島潔

發行所　東京市日本橋區本石町三丁目十六番地　株式會社博文館
振替口座東京二四〇番

製版所　共同印刷株式會社
印刷所　共同印刷株式會社
製紙所　王子製紙株式會社
製本所　井上製本所
製函所　香取製函所

78
ㅏㄷ3M-P8

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black